

てゐる汐から聲がガミ／＼耳に付き出した。

幾十人も立ち上つたり、岸へ綱をしぼり付けたり、竿で押したりしてゐる様が、手にとる様に幻影となつて見えるのだ。

初めは何でもなかつたが、急に僕はそれが僕の自殺を防ぐ、即ち僕が海に飛び込んだりするのをさまたげる爲に、態とたくらんでやつてゐるのだなと思ひ出した。

ゆふべも刑事が床の下に居て、僕のした事を一部四汁聞いてゐたかも知れない。

遂々最後の時が来た、此んな大げさな昂奮を僕はしたのだ。

拳骨を固めて、漏斗を小脇にかい込んで身構へした。

そして尙も聲をはり上げて、観音經をやつてゐると、廣間を走つて慌たゞしく、此方に向つて走つて来る足音がした。

僕は刑事だなと思つたから、身を起して部屋の板戸をあけたのだ。

すると厚司を被た二人の男が、襖のところで来てゐたが、僕の逆上した目を見て、恐ろしさに顫え上つたものか、矢庭に踵を返して、脱兎の如く金あみを越えて逃げて行つた。